2022年度NGOスタディ・プログラム最終報告書

提出日	2023年2月20日		
氏名	水上　友理恵	団体印	
所属団体(正式名称)	公益財団法人プラン・インターナショナル・ジャパン		
派遣タイプ	実務研修型		
研修国	インド		
受入機関名	Myna Mahila Foundation | Plan International (India Chapter)		
研修期間	2022年11月20日～ 2022年12月11日	研修日数	21日間
研修テーマ	ユースと取り組む女の子・女性のエンパワメント実践例を学ぶ： 月経衛生と健康の啓発、ジェンダーに基づく暴力から女の子を守る		

目次

1. 導入 3
2. 本文 4
2-1. Myna Mahila Foundation（月経衛生を通じたスラムの女の子・女性支援） 4
2-2. Plan International India ジェンダーに基づく暴力から女の子を守るプロジェクト 7
2-3. Plan International India 生理について恥ずかしがらずに話そう 8
3. 考察・提言 9
3-1 結論 9
3-2 本研修成果の自団体、NGO セクターの組織強化や活動の発展への活用方針・方法 9
3-3 テーマに関する日本の国際協力分野への提言 10
4. 団体としての今後の取り組み方針 10
5. その他 10
5-1 本プログラムや事務局側に対する提案・要望等 10
5-2 写真類及び受入先機関に提出した報告書類 10

1. 導入

公益財団法人プラン・インターナショナル・ジャパン(以下、プラン)は「子どもの権利が守られ、女の子が差別されない公正な社会を実現する」をミッションに、1983 年より国際 NGO プラン・インターナショナルの一員としてアジア、アフリカ、中南米合計50 カ国以上で地域開発活動を実施してきた。教育、子どもの成長、性と生殖に関する健康と権利、生計向上、子どもの参加、子どもの保護という6つの重点分野にて、生活基盤を整えるための包括的な開発援助プロジェクトおよび緊急復興支援を行っている。重点分野である「性と生殖に関する健康と権利」において、プランは月経衛生管理やジェンダーに基づく暴力(以下、GBV)といった支援を続けてきた[1]。近年、プランはタンザニアやネパールにおいて月経衛生管理のプロジェクトを実施[2]するほか、2021 年には「日本のユース女性の生理をめぐる意識調査結果」[3]を発表し、反響を呼んだ。

月経やGBVに関するスティグマ(差別や偏見)が存在する国も多く、インドでの月経に対する認識は顕著な例である。今でも、インドでは「月経中の女性は不浄であり、寺院に入ってはいけない、ピクルスを触ってはいけない」といった迷信が信じられている。[4]このような背景から、衛生施設の整備や生理用品へのアクセス、月経衛生管理の知識の普及だけでなく、スティグマにさらされる女の子や女性たちのエンパワメントの重要性は極めて高いといえる。

しかし、性と生殖に関する話題はセンシティブであり、日常的に話すことがタブーであることも多い。月経衛生管理やGBVの分野で女の子や女性のエンパワメントを行うには、コミュニティの特色をとらえた上でのプロジェクト参加者、特にユース(女の子・若い女性)との信頼関係構築・協働が必要である。そうしたアプローチを学ぶには、現場での実践例を視察することが重要だといえよう。

研修先の一つである Myna Mahila Foundation[5]は、「女性のエージェンシーと意思決定能力の向上を通じ、女性が自信を持ち、経済的に自立し、健康になる」をミッションに、インド・ムンバイ(地図①)を拠点に 7 年間、活動しており、これまで 60 万人もの女の子や女性たちにリーチしてきた。スラムの女性たちを雇用し、生理ナプキンの制作・販売を行うほか、ムンバイの教育機関やスラムにて女の子・女性を対象に、衛生・健康の観点から、月経に関する意識啓発活動を行っている。また、もう一つの研修先である Plan International India では、ムンバイにて「ジェンダーに基づく暴力から女の子を守る」プロジェクト[6]、またデリー(地図①)では、「生理について恥ずかしがらずに話そう」(Why Shy to talk Periods)プロジェクトを実施しており、女の子・女性たちへのエンパワメントを行っている。

私は、ラオスにおける月経衛生管理を含めたジェンダー視点に立った衛生改善案件の形成を担当しており、将来的には現地に駐在し案件監理を統括する展望を持っている。しかし、途上国での女の子・女性のエンパワメントのアプローチ、特にユースとの協働に関する現場経験が不足している。本研修の目的は、現地での活動視察を通じて、文化や慣習から来る根強いスティグマの現状に関して理解を深め、月経衛生分野およびGBVに関して、女の子や女性

---

[1] プラン・インターナショナル(2022)https://www.plan-international.jp/activity/effect/right/

[2] シチズンウオッチオフィシャルサイト(2022)「国際NGOプラン・インターナショナルの活動の応援について」

[3] プラン・インターナショナル(2021/4)「日本のユース女性の生理をめぐる意識調査結果」以下リンク参照:
https://www.plan-international.jp/activity/pdf/0413_Plan_International_Ver.03_01.pdf.

[4] Garg S, Anand T. (2015) "*Menstruation related myths in India: Strategies for combating it*", J Fam Med Primary Care. https://www.ncbi.nlm.nih.gov/pmc/articles/PMC4408698/

[5] https://mynamahila.com/

[6] プラン・インターナショナル(2022) https://www.plan-international.jp/kifu/girls/10511.html

たちのエンパワメントの実践例やユースとの連携アプローチについて学ぶことである。また、活動を視察の上で、その活動の拡大・持続可能性についても提言を行い、よりよいプロジェクト実施について実践的に考察する。そして、本研修で学んだことを活かし、実施予定の案件のインパクトの最大化に努めたい。また、団体内外で学んだことを共有し、プランおよび日本の NGO が月経衛生管理・および GBV の分野で、スティグマを払拭し、ジェンダー規範を変えられるような効果的な支援を行えるよう、貢献していきたい。

2. 本文

2-1. Myna Mahila Foundation（月経衛生を通じたスラムの女の子・女性支援）

ムンバイにおけるスラムの状況

ムンバイ（地図①）の 1,200 万人の人口のうち 65%がスラム在住である。[7] ムンバイには、トタン屋根とビニールシートにて構成される平屋がつながる「横型スラム」（写真①）が広がっているが、近年、インド当局は“ムンバイをスラムフリーに”という目標を掲げ人口密集型の高層アパート「縦型スラム」（写真②）を建設している。インド当局は、家賃を低価格に設定し、「横型スラム」に住む貧困層の住民移転を進めている。今回私が実践型研修を行った団体 Myna Mahila Foundation（以下、Myna）は、そうした「縦型スラム」に拠点をおく（地図②）が、スラムの形態が変わっても、依然として衛生に関する課題は多い。

横型スラムと縦型スラムの共通する衛生課題

- 住民は、衛生について教育を受けておらず、衛生習慣が身についていない。平屋のスラムで暮らしてきた住民は、路上での生活習慣（排泄、ゴミの廃棄など）を続け、集合住宅の敷地内は不衛生である。
- 住民は貧困層であり、暮らしていくのに精一杯。公共の場所を掃除するといった経済的、精神的余裕がない。
- 部屋に十分な換気口がなく、小窓が 1 つのみの場合もあり、部屋の中は大変暗い。洗濯物は部屋干しが多く、日光に当てられず、換気が不十分であるため、雑菌が発生しやすい。家の敷地内にトイレがない場合もあり、安全でない公共トイレを使っている場合もある。

スラムにあるコミュニティでの啓発活動（チャンピオンズ・プログラム）

Myna の核ともいえる活動が「チャンピオンズ・プログラム」と呼ばれている、スラムでの啓発活動だ。2021 年から開始し、現在 6 つのスラム・コミュニティで活動している。健康が最優先であると参加者に理解してもらうため、最初の半年は、月経衛生管理やストレス・マネジメントなど健康管理に焦点をあて、残りの半年はライフスキル向上に注力している。セッション場所の確保、集客、実施を行うのは、カウンセラーの資格も持つ職員のスルシュティさん（25 歳）と、Myna の「フェローシップ」[8]に選出された後、職員となったアルフリィさん（15 歳）だ。（写真③）

---

[7] In Mumbai's slums, over half of population probably infected with coronavirus, survey says | Reuters

[8] フェローシップ・プログラム

Myna では2017年からの 3 年間、貧困層の女の子をフェローとして継続的な経済的支援を実施していた。教育を受け続けることを目的に、毎月 2,000 インドルピー（3,700 円）を、計 10 人の女の子に対して支給してきた。Myna のアプローチとして興味深いのは、フェローを一律支援するだけでなく、リーダーシップとモチベーションのある女の子には、データ分析、コミュニケーションスキル等の研修を実施し、「フェローリーダー」として育成する点である。こうして、すでに1名のフェローリーダーは Myna の職員として働いているほか、2 名のフェローは Myna の事業をサポートしている。しかし、Myna はフェローシップという女の子への経済的支援をやめた。その背景として、収入向上を求めているフェローは、より高給な仕事を見つけてフェローを辞めてしまう、お金の使い道が、教育費ではなく服飾品や高価なスマートフォンなどに使われた事例があったからだそうだ。フェローシップに選抜された女の子たちは、非常に賢かったそうだ。にもかかわらず、目的が誤解されると、経済的支援は意図しない目的で使われるリスクがある。

同行した関心向上セッションでは、ビデオ[9]や職員との対話を通じ、「男性も家事・育児を行い、女の子が家事手伝いでなく勉強に集中できる家庭」を推奨し、家事育児の保護者間での役割分担など性別役割分業の問題点とジェンダー平等の大切さ、トランス・ジェンダーの存在などを伝えていた。

スラムでの活動は、活動場所の確保や実施時間が課題だと明らかになった。研修はスラム内の民家を間借りして行う場合が多く、場所の確保にもひと苦労であった。(写真④)スラム内のコミュニティセンターが別団体に急遽使われ、使用できないこともあった。民家のリビングに最大で 20 人がすし詰め状態となりセッションを実施し、計 3 回のセッションに累計 42 人が参加。予定した利用時間を過ぎ、家主からセッション終了を促されていた。また、参加を呼びかけても、家事や育児で忙しいという理由で、思うに集まらないことも。住民参加型の活動には、活動場所が常に用意できること、参加者が自発的に参加したいと思えるか、が重要だと実感した。

本活動に 1 年間参加した女の子・女性たちからは、活動を通じた変化について以下の意見を得た。(写真⑤⑥)

"月経は穢れていると思っていましたが、活動を通じて、月経は胎児を育てる重要な役割を果たすものだと認識が変わりました。ジェンダー平等を学び、家事や育児を夫と分担したいと思いつつ、私の夫は夜遅くまで働いており、実践は難しいと感じています。せめて、自分の子どもたちにはジェンダー平等の大切さを教えたいです。また、研修を通して、自信をもって英語を話すことができ、子どもの宿題の英文を理解できました。"

アルシャナ・ソニ (27) プロジェクト参加者

"姉妹で研修に参加し、ジェンダー平等について以前よりも話すようになりました。今では、父親とも月経について話すことができます。また、「月経中にはピクルスに触ってはいけない」という迷信を信じていましたが現在は平気で触っています。一方で、父親からは大学進学の許可が出ず、家で裁縫の内職をしています。本当は勉強を続けたいです。"

シャマ・ハシミ(20) タバスム・ハシミ(18)プロジェクト参加者

ほかにも、研修に参加した女の子や女性たちの多くが「月経に関する差別や偏見に対する正しい知識を得たおかげで意識や行動が変わった」と答えてくれた。しかし、夫や父親など、男性側の意識や行動を彼女たち自身の働きかけで変えていく、という段階には至っていない現状も垣間見えた。

中学・高校・大学での啓発活動(TMI:Teach Menses in India)

インドには、月経中の行動規範に関する昔からの言い伝えや迷信が多数残っており、月経中の多くの女の子や女性の行動が制限されている。触ってはいけないとされるピクルスは塩気や油分が多いため、健康の観点から控えた方が良いものかもしれないが、「穢れているから触ってはいけない」という考え方は、「女性は穢れた存在であり、地位が低いもの」という女性自身による誤った思い込みを助長しかねない。

Myna では、高校や大学などの教育機関において、女子学生を対象に、思春期の身体の変化、月経に関する迷信、月経の仕組み、衛生習慣や月経用品(生理ナプキンなど)に関する啓発活動を月 10 回ほど実施している。インドの教育機関では、保護者からの反発が予想されるため、教師は受精については教えるが、妊娠の過程は教えない。生殖に関することを他団体が教えるのは稀である。Myna は、教育機関からの許可を得るために、活動の対象は女子生徒、内容は月経に関する情報に限っている。男子生徒を対象とすること、および性教育(妊娠の仕組みや、避妊方法など)

---

[9] "Impossible Dreams"(1983) United Nations. 以下リンク参照: https://youtu.be/t2JBPBIFR2Y

は、学校長から許可されず、教えられない。

大学での啓発活動（写真⑦）では、月経に関する迷信が誤りを正し、月経中の推奨行為の理由を健康面から説明していた。月経中の行動に関する言い伝えについて、疑問を持つ重要性を伝えている点が、Myna らしいアプローチだと感じた。

こうした啓発活動を率いているのは、スラムに住んでいる 22 歳のアイシャ・シャイクさんだ（写真⑧）。アイシャさんの家族は大学進学までは応援してくれたものの、女性が外で働くことについては反対していた。しかし、3 年前に彼女は Myna でスラムの女性のために働きたいと家族を説得。現在は啓発活動のトレーナーとして、月経衛生管理に関する正しい知識を学生たちに伝えている。経済的にも自立し、家族の医療費を負担するなど家計を支えており、そんな彼女の姿を見て、家族も応援してくれるようになったという。

> “Myna での活動に参加するまでは、他人と、特に初めて会う人に対して、新しい考えを伝えるといったコミュニケーションをとることに、全く自信がありませんでした。今では、自信をもって考えを伝えられます。また、新しいスキルを学ぶことに前向きになれました。これからは英語を上達し、文書作成などを訓練し、学生への啓発活動だけでなく、Myna の他の仕事もぜひ挑戦してみたいです。”
>
> アイシャさん（22）、マイナ・トレーナー

Myna Mahila Foundation への提言

研修の終わる数日間にわたり、研修先の設立者・代表（写真⑨）や、今回の研修の受け入れを担当してくれたマネージャーと議論をしながら、Mynaへの提言をまとめた。以下にその議論と提言を記す。

Mynaの優れている点は、職員の中でもスラム出身の貧困層と、中流～上流階級出身がいる中で「Mynaは家族」と口にする職員が多く、お互い信頼し、チームワークが素晴らしい点である。また、人材育成の仕組みが整っており、成長する機会がある。やる気と努力が伴えば、スラム出身の女性であろうが、生理ナプキンの製作から徐々にスキルを磨き、レクチャーの講師や、アプリの開発など様々な仕事を経験できるチャンスを用意している。そして、職員は高いモチベーションと情熱を持ち、質の高い活動を行っている点も、長所だと感じた。

一方で、課題も散見された。第一に、参加者の生活時間を十分に考慮しないまま活動の時間帯を設定しているため、参加者が、活動に参加しづらいほか、活動に集中して参加できないなど、支障が生じていた。例えば活動の時間帯が昼寝の時間帯と重なる、学生の下校時間と活動の時間帯が重なり、帰宅が遅いことを心配した保護者から参加者の携帯に電話がかかってくるという事例が見られた。第二に、参加の呼びかけから、場所の確保、啓発活動の実施まで全て職員が行っており、持続性や拡大可能性に欠ける点である。特に、参加者が自発的に参加するところまで至っておらず、参加の呼びかけに時間と労力を費やしていた。第三に、啓発活動ではジェンダー平等の視点から行動変容を促しているものの、研修後になかなか行動変容に結びつかない点である。具体的には、「家事や育児を男女で平等に分担する」ことを勧めても、研修では女性や女の子のみが参加しているため、研修に参加していない男性や男の子を説得し、家事を平等に分担することは難しいとのことだった。

以上の団体の長所と課題を踏まえて、3 つの提言を行った。

一点目は、これまでスラムや教育機関での研修や啓発活動に参加した女の子や女性たちを巻き込み、参加者募集に協力してもらうことである。例えば、参加者募集に協力してもらえれば、参加者の口コミによる参加者募集などが

可能になり、職員の負担が軽減でき、より持続性、効率性が担保できる。

二点目は、研修の参加者のうち希望者へのトレーナー研修の実施を通じて、プロジェクトの持続・拡大可能性を担保することだ。スラムの女性や女の子たち、また高校や大学に通う女の子たちが、周囲に月経に関する正しい知識を広められるよう能力を強化する。また、研修に参加した女の子や女性が研修を実施することで、より参加者のニーズをとらえた研修が実施可能であろう。現地では、研修内容を教えることに関心を持つ参加者や、トレーナー研修の実施ができると答えた職員が複数人いた。また、Myna の長所である人材育成の仕組みも活かすことができる。育成したトレーナーのうち、よりやる気と能力のある女性たちを、Myna の他の業務に抜擢してもよい。そうすることで、Myna の月経衛生管理の研修を糸口に、経済的により自立できるように女性・女の子たちを支援できる。研修に参加することで、未来のチャンスが増えると想像できれば、参加への自発的なモチベーションを生み出すことができるのではないか。

三点目は、男性や男の子の参加である。男性や男の子の参加が許可されにくい教育機関と違い、スラムでは、男性や男の子の参加が可能である。特に月経への偏見や差別、ジェンダー平等における行動変容を促すためには、男性や男の子の知識や理解が必要である。時間帯や活動場所を工夫し、スラムでの啓発活動に男性や男の子を巻き込むことが、家庭内、コミュニティ内での行動変容につながる。参考として、プラン・インターナショナルのジェンダー・トランスフォーマティブ・アプローチ[10]も紹介した。

2-2. Plan International India「ジェンダーに基づく暴力から女の子を守る」プロジェクト

活動概要

視察した活動は 2020 年 7 月～2023 年 12 月と約 3 年半、1 億 2 千万円の規模のプロジェクトである。ジェンダーに基づく暴力(GBV)の被害を受けた女の子や女性約 1200 人を対象に、心理カウンセリングを実施している。そのほかに、大人と子どもを含む地域住民約 20 万人に対し、GBV についての意識啓発・予防キャンペーンの実施、司法機関や警察関係者の能力強化支援をしている。こうした活動を通じて、被害を受けた女の子や女性が公平な裁判をうけ、人権が守られること、心身の傷から回復し生きる力を取り戻すこと、また、地域社会が GBV の弊害を学び、ジェンダー平等を理解することを目指している。

ユースとの協働事例:児童保護施設

GBV を受けた女の子たち(6～18 歳)は、子ども福祉委員会(Child Welfare Committee)のカウンセラーなどとの面談を経て、児童保護施設(Child Care Institution)にて保護される。こうした保護施設は、ムンバイの位置するマハラシュトラ州で 839 施設あり、うち 46 施設が政府によって公的に運営され、残り 793 施設はチャリティ団体やボランティアによって運営されている。1 つの施設に平均して 30～40 人ほどの子どもたちが生活を共にする。GBV を受けた女の子たちのための施設は、入居者は女の子のみであった。この施設の目的は、被害を受けた女の子たちが、生き延びるだけでなく、ケアをうけ、成長できることを目的としている。保護施設に来る女の子は、ほぼ性暴力や虐待などの暴力のサバイバーであり、肉体的な被害だけでなく、精神的な被害を受けていることが多い。人によって、抱えている問題はさまざま。子ども福祉委員会が決める滞在日数も、最短で 1 日、最長で 1 年と滞在日数にも個人差がある。

プラン・インターナショナルは週一回、カウンセラーを含むスタッフが施設を訪問し、カウンセリングをはじめとしたケアを行っている。現場の女の子たちの様子を見て、プランによる、カウンセリングやダンス、絵画などの活動(写真

---

[10] プラン・インターナショナル(2021)ジェンダー・トランスフォーマティブ・プログラムガイドブック https://www.plan-international.jp/about/pdf/2104_GTP_guidebook.pdf

⑧)を楽しんでいる様子がうかがえた。また、こうしたカウンセリングの効果として、自分でコントロールできることの範囲を正しく理解し、怒りをコントロールできるようになった、過去に受けた経験にとらわれず将来やりたいことを思い浮かべられるようになったなどの感想が、女の子たちから挙げられた。

訪問した施設のうち、Swapnalay Child Care Institution では「子ども委員会」を設置し、子どもの自主性を活かした施設運営を行っていた。「子ども委員会」が施設での活動内容を決め、職員はあくまでも活動の実施のサポートを行う、という位置づけである。活動内容は、ライフスキル、衛生習慣、月経衛生管理、感情マネジメントなどさまざまあり、その中から、子どもたちがやりたいものを選ぶ。子どもたちが施設に滞在する期間は様々であるため、毎月、メンバーを選挙で選び、運営している。新しく入居する子どもたちへのオリエンテーションも「子ども委員会」が行っているそうだ。訪問時、入居している子どもたちが、これまでの活動の成果を積極的に見せてくれた(写真⑪)。「子ども委員会」の運営を通じて、入居した子どもたち同士が学びあう関係性が自然と育まれているように感じた。暴力の被害を受けた女の子たちが施設運営の協働者として主体的に活動することで、その被害から回復するだけでなく、成長しているように思う。

2-3. Plan International India 生理について恥ずかしがらずに話そう

活動概要

視察した活動は、生理用品を扱う米企業 Kotex とのパートナーシップによる「インドでの月経衛生教育」事業 "Why Shy to talk Periods/生理について恥ずかしがらずに話そう"[11]である。ジャークハンド州とデリー首都圏で、合計 20,000 人の子どもたちや保護者などを対象に、ジェンダー・トランスフォーマティブ・アプローチ[12]を用いて、月経の衛生と健康にまつわる差別や偏見をなくし、月経を前向きにとらえるための意識啓発活動を行っている。こうした活動をつうじて、女の子たちが、自信と尊厳を持ち安全に月経を管理できるようになることを目標としている。

ユースとの協働事例:ピア・エデュケーターの育成

このプロジェクトでは、同世代の仲間に啓発活動を行う「ピア・エデュケーター」の育成に力を入れている。「ピア・エデュケーター」たちは、トレーナー研修を受けたのち、ほかのユースに生理について教える役目を担う。若者たちが、楽しみながら月経について学びあえる教材が提供されるほか、周りのユースたちに教えるたびに、ピア・エデュケーターが達成感を味わえるようなスタンプカードなどがあり、主体的に活動に取り組めるような工夫が凝らされていた。デリーでの活動地域は、スラムを再開発したあとにできた町であり、比較的貧困層が住んでいる地域である。ユースたちが放課後や登校前に安心して集まれる場所がないことを踏まえ、プロジェクトでは、活動拠点を用意し、かれらがいつでも、生理について学び、ヨガなどのアクティビティも実施できるような環境が整備されていた。

---

[11] プラン・インターナショナル(2023)Menstrual Hygiene Education in India | (planindia.org)

[12] プラン・インターナショナルの「ジェンダー・トランスフォーマティブ・アプロ―チ」とは、ジェンダー主流化として、特にプログラムとアドボカシーの活動に、以下の 6 つの要素を可能な限り取り入れるアプローチのことです。(「ジェンダー・トランスフォーマティブ・プログラムガイドブック」p.10 より)

ジェンダートランスフォーマティブの 6 つの要素

1. ジェンダー不平等とその根本原因となるジェンダー規範を変える。
2. 女の子と女性が自分の人生に関わる、大切だと思う事柄について、自由に選択と意思決定をし、自分の目標に向かって行動が出来る実現可能力(エージェンシー)を支援する。
3. ジェンダー問題は、男の子と男性との関わりのなかで生まれる問題であることから、女の子と女性だけではなく、ジェンダー平等達成を目的とした男の子と男性のエンゲージメントを図る。
4. 女の子と女性の状況(コンディション)改善だけでなく、社会的地位(ポジション)を向上させる。
5. 障害の有無、民族、人種、セクシュアリティ、年齢、教育、貧富の差などにより、個々の経験が異なるため、多様な子どもとユースの異なるニーズを明確にし、差別や排除の問題に取り組む。
6. 差別的、排除的な法律や制度、社会構造を変える。

ピア・エデュケーターたち(男女)は、「男性の前でも生理について話せるようになり、家族に生理について教えられるようになった」「生理に関する様々な迷信を信じていたけれど、今では正しい知識がわかる」と語っていた(写真⑫)。ピア・エデュケーターたちが活動を心から楽しみ、やる気に溢れ主体的に活動している様子が肌で感じられた。また、生理に関する知識を同世代の仲間に伝えることにより、プレゼンテーション能力などのライフスキルも高まり、ピア・エデュケーターたちの自信や行動力が非常に向上したことが分かった。

3. 考察・提言

3-1 結論

今回の研修を通じて、ユースとともに月経衛生管理や GBV に関連する活動を進める上で、女性や女の子のエンパワメントを実現するには、以下の視点を考慮すべきである。

i. ユース同士(ピア)の学びを促進することが重要。ユースが周囲のユースに教えることで、楽しく自発的に学びを深められる。大人の観点では、月経衛生管理は重要性が理解しやすいトピックかもしれない。一方で、ユースには「楽しい、参加したい、教えたい、ワクワクする」と自発的に思えるような内容やアプローチにしたほうがよい。例えば、月経に関する知識だけに限らず、ヨガや英語など、楽しくニーズのある内容も含めた活動にするなど。

ii. ユース、特に女の子や若い女性に対して、自由に使えるリソースを用意する。地域での活動拠点や、月経について学べる教材などを用意する。また学業や家事、育児などで自由に使える時間も非常に限られているため、参加しやすい時間帯に活動を行うなどの配慮が必要。スマートフォンをつかった意識啓発は一部効果的だが、貧困層では家庭内で男性がスマートフォンの使用を管理している場合もあるので、要注意。また、経済的支援は、使途が限定されない場合、支援の目的にそぐわない使用も起こりうる。使途を限定する、事前に合意するなど工夫が必要。

iii. 男性や男の子の巻き込みは、行動変容の促進に必須である。生理に対する差別や偏見は、女性や女の子だけが持つものではない。また、そうした差別や偏見の根底にあるジェンダー平等に対する意識や行動を変えるためには、意思決定権を持っていることが多い男性の巻き込みが必要である。

iv. 衛生に関する知識や行動は習慣に落とし込めるまで浸透させる必要がある。インドに滞在し、スラムに通うなかで、どれほど施設を整備しても、それを維持管理し、衛生習慣を個人が身につけないと、衛生環境は改善しないことを目の当たりにした。特に、貧困層は生活に余裕もないため、こうした衛生習慣を身につけることで、具体的にどのようなメリットがあるのかを理解してもらうことが大事だと思った。

3-2 本研修成果の自団体、NGO セクターの組織強化や活動の発展への活用方針・方法

今回の研修を通じて、月経衛生管理やのプロジェクトにおいて、ユースの主体的参加や協働の効果的なアプローチを、現場での実践例の視察や参加者へのインタビューを通じて具体的にイメージできた。今後、途上国において、月経衛生管理や GBV 等のプロジェクトを現場責任者となる場合には、以下の点を実施していきたい。

i. 自身が担当する月経衛生管理のプロジェクトで、本研修で得られた学びを踏まえた活動内容を設計・実施する。

ii. 本研修で得られた学びを団体内で共有し、特に関連するプロジェクトの担当者が、プロジェクト形成や管理に参照できるようにする。既に団体内で報告会を開催したほか、プラン・インターナショナルの Web サイト[13]にて、本研修の学びを「タブーを破る～『月経衛生管理』インドのスラムでの実践例～」と題し、共有済。

iii. 他の NGO や報道機関などに対して本研修で得た学びを共有し、NGO セクターの知見の強化や市民の関心向上に貢献する。2023 年 1 月 18 日に、北鎌倉女子学園高等学校にて、講演会を行った[14]。

iv. 高校や大学などの教育機関で、本研修で得た学びを共有し、日本国内でもユースの主体的な活動を支援する。

---

[13] プラン・インターナショナル(2023/02/02 更新) プラン・ブログ「タブーを破る～『月経衛生管理』インドのスラムでの実践例～」 https://www.plan-international.jp/blog/8385/

[14] 北鎌倉女子学園(2023/1/18) https://www.kitakama.ac.jp/2023/01/18/16515/

3-3 テーマに関する日本の国際協力分野への提言

このテーマで、差別や偏見をなくすなど、社会的な行動変容を促すためには、地域によってセンシティブでタブーなテーマではあるが、女性や女の子だけでなく、男性や男の子も巻き込んだ活動にするべきである。また、実施側としては知識を学んで衛生的な習慣や安全なふるまいを身につけてもらいたいという意図や目的があったとしても、鍵となる参加者であるユースが、学びに楽しみや興味を覚え、主体的に取り組みたいという動機があってこそ、自身の習慣やふるまいが改善される。その中で、同世代(ピア)に教えることで、より学びが深まり、主体的に活動に取り組めるケースが多く見られたため、こうしたピア間での学びを促進することが、このテーマでの行動変容を促すアプローチとして有効である。

4. 団体としての今後の取り組み方針

プラン・インターナショナルでは、月経衛生管理や GBV のプロジェクトを様々な国にて実施し、インドでもそのようなプロジェクトの実施経験があるものの、本研修に団体職員が参加し、こうしたテーマで、現地 NGO にて、数週間にわたって活動を視察し、学びを得るということは、本団体としても貴重な経験となった。団体としては、月経衛生管理や GBV など、性と生殖の健康と権利の分野でのプロジェクトの形成・管理に活用していく。

既に、本団体の Web サイトで本研修での学びをブログにまとめて公開しているほか、団体職員向けに、写真を交えながら本研修で得た学びを共有するなど、報告会も開催した。今後、月経衛生管理や GBV、ユースとの協働を活動に含む案件を担当する職員は、特に本報告書を参考にしながら、案件を形成・管理することを目指したい。

また、当団体は JANIC のジェンダーWG のフォーカルポイントを務めており、今年度 NGO 研究会でも「国際協力におけるジェンダー主流化に向けた課題と実践」を受託し実施している。このような NGO の団体間での学びの場にも今回の研修参加職員が積極的にインプットし、日本の国際開発業界全体へのジェンダー主流化に貢献してゆきたい。貴重な経験を研修を通じて頂いたことを感謝いたします。

(プラン・インターナショナル　専務理事・事務局長　棚田雄一)

5. その他

5-1 本プログラムや事務局側に対する提案・要望等

本プログラムや事務局には、研修の企画段階から、実施中まで細やかなサポートをいただき、おかげで滞りなく研修を終えることができた。貴重な現場経験を積ませていただいた本プログラムの関係者の皆さまには心から感謝を申し上げたい。よりスムーズな研修実施について、以下二点ほど提案したい。

(ア) 申請書類(application)と最終報告書記載内容について

申請書類では主に職務履歴書、研修効果と NGO への還元方法に焦点をあてていた。一方、最終報告書では、研修前の問題意識、また NGO が持つ課題、課題解決方法を記載することが求められる。申請書類でも、問題意識や NGO が持つ課題について記載する欄があれば、最終報告書執筆前にも、「NGO の持つ課題とその解決方法を他団体の実践例や研修から学ぶ」という意識をより強く醸成でき、本プログラムの研修効果がより高まるのではないかと感じた。

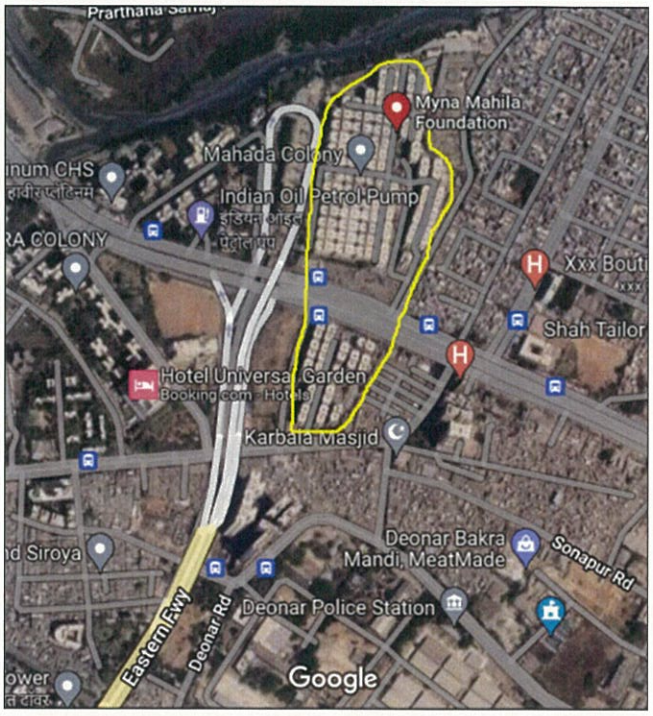
(イ) 提出書類への押印やサインについて

会計上必要なものもあると思うが、特に団体印だけでなく、事務局長のサインなどが求められる場合、研修の参加者本人や事務局長が海外出張で不在の場合、申請作業を進める上での障害となる。例えば、電子サインや押印の省略等をご検討いただけると、ありがたい。

5-2 写真類及び受入先機関に提出した報告書類

図・写真報告

地図①インドにおけるムンバイとデリーの位置

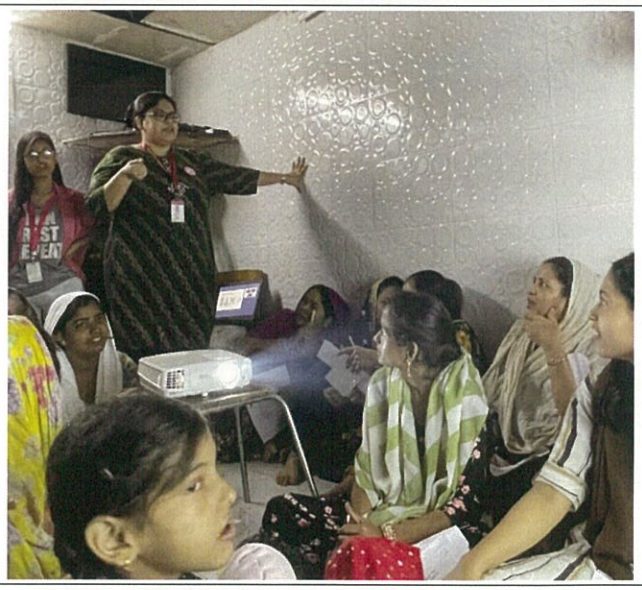


地図②黄線の「縦型スラム」内に拠点をおく Myna

写真① 平屋が連なる横型スラム

写真②Myna のある縦型スラム敷地内の共用部

写真③アルフリィ(左)とスルシュティ(右)

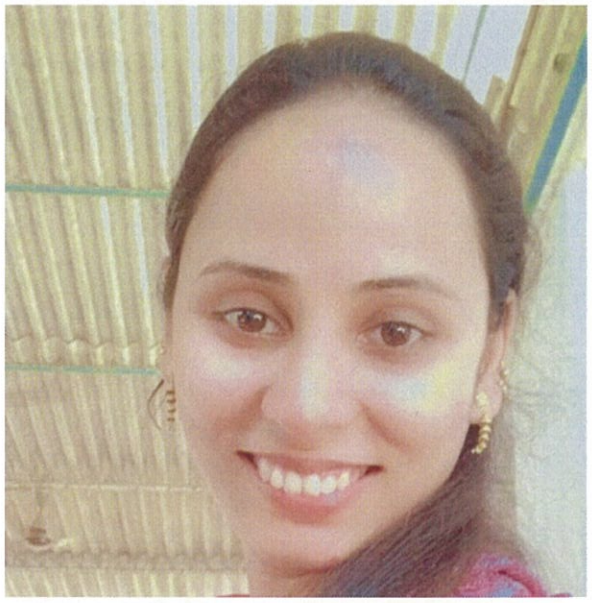


写真④民家の部屋にすしづめ状態で座る参加者

写真⑤アルシャナ・ソニさん

写真⑥シャマ・ハシミ(左)タバスム・ハシミ(右)姉妹

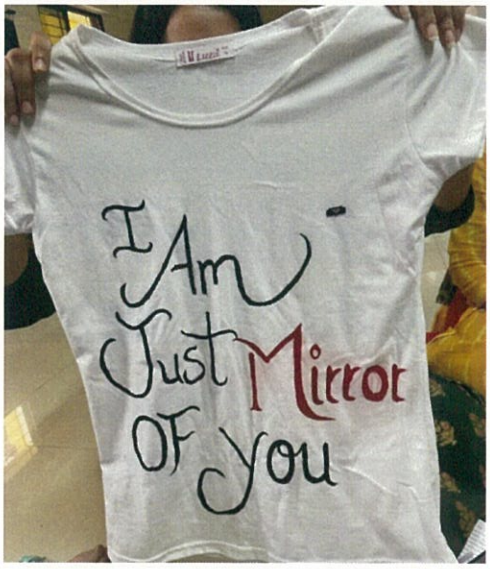
写真⑦大学での月経衛生に関する啓発活動



写真⑧アイシャ・シャイクさん

写真⑨Myna の設立者・代表スハニ・ジャロタさん

写真⑩グループセッションを行うプランのカウンセラー

	
写真⑪保護施設での活動で作成したＴシャツ	写真⑫活動について話すピア・エデュケーター